

音楽教育における様々なカスタネットの変遷

— 明治時代から昭和30年頃を中心に —

門脇 早穂子

はじめに

本研究の目的は、教育用の簡易楽器として知られているカスタネットに注目し、楽器が輸入された明治時代から昭和初期にかけてと、器楽教育導入期である昭和22(1947)年から昭和30(1955)年頃までの歴史を概観することである。

現在の日本の保育園や幼稚園では、単純な操作で音が出る鈴、タンブリン、カスタネット等の様々な楽器が、用いられている。これらの楽器の中でもカスタネットと言えば、赤と青色2枚の木片をゴム紐によって結わえたものを誰もが想像するのではないだろうか。日本で一般的に考えられているこのカスタネットは、戦後の日本で独自に作られた楽器で、当時はハンドカスタという名前で教育楽器として販売されていた。しかし実は、ハンドカスタよりも前にミハルスという楽器が考案されている。この楽器は、遊戯や体操の中でリズムを明確に取るために作られたのである。

しかし、これらの楽器が作られるまで、日本にどのような種類のカスタネットが存在していたのか、またハンドカスタが普及した後、現在に至るまでどのような足跡をたどったかは明らかでない。そこで、ミハルスが作られる

以前の日本におけるカスタネットの歴史、そしてハンドカスタが普及した後の昭和30(1955)年頃を中心に、教育用に作られたカスタネットの歴史の変遷を概観する。

1. カスタネットの起源

カスタネットとは、スペイン語の“カスティア(castanetas, castanuelas: 栗の実)”が語源である(鳥 1989:6)。カスタネットの起源は、一説によると、古代エジプトの儀式で、20~30cmの長さの木製または象牙製の打楽器を両手に持って叩いていたことに始まる。その楽器が紀元前にクロタロン(crotalon)という楽器としてギリシャに伝わった。次にイタリアにもたらされた時には、クロタロ(crotalo)と呼ばれ、民衆の踊りに用いられた。その後は、マロネーチ(marronettes)やクルスマータ(crusmata)、パリージョ(palillos)などの名前で各地に伝わり、スペインで改良された楽器が、現在のスパニッシュ・カスタネットとされている(鳥 1989:6)。ヨーロッパを中心とした国々では、このスパニッシュ・カスタネットの他にも、柄付きカスタネット、コンサート・カスタネットが存在し、その特徴と演奏方法は表1の通りである。

表1:ヨーロッパを中心とした国々で使用されているカスタネット

カスタネットの種類	特徴	演奏方法
スパニッシュ・カスタネット	8cm前後の帆立貝のような形をした小木片の付け根に穴を開け、窪んだ部分を向い合せにし、親指を通すための紐が通されている。2組同時に演奏するが、それぞれの音高が変えられており、高い音のエンブラ(hembra:女性)と低い音のマチョ(macho:男性)に分けられる。材質はローズウッド、黒炭などの堅い木が用いられる。打ち合わせる貝殻型クラッパーとして分類され、古代ローマや中世において用いられた。	通常、右手にエンブラ、左手にマチョを持つ。紐を親指と人差し指にかけ、手を握るようにして奏する。
柄付きカスタネット	片手で演奏出来るように柄をつけたもの。種類は二種類あり、一つは柄の付いた台板の両側に同じ素材の小型のカスタネットが紐で付けられている3枚板のもの。もう一つは、柄に同じ素材の小型のカスタネット2枚が共鳴胴を内側にして紐で付けられているもの。両方ともオーケストラで使用されている。	演奏方法はそれぞれ次の通りである。3枚板の方は、柄を持って上下に振るようにして奏する。2枚板の方は、右に持ち左の手のひらに打ち付けてリズムを強調する方法と、左右の手にそれぞれ持ち、膝に打ち付けて演奏する方法がある。
コンサート・カスタネット(マシン・カスタネット)	堅い木でつくられた共鳴板の上にゴム紐または金属のバネを用いて、2枚の貝殻型の木片が横に並べて取り付けられている。	紐または金属のバネの力で跳ね返ってくるため、スパニッシュ・カスタネットに比べ容易である。指または柔らかいマレットで奏し、細かいリズムを奏するのに適している。

出典 網代;岡田 1981:37-38, 網代;岡田;松原 1993:408-4091に基づき門脇が作成したものである。

まず、スパニッシュ・カスタネットは、スペインのフラメンコを踊る時に使用される楽器である。そもそもフラメンコは南スペインのアンダルシア地方に住み着いたジプシーの中で生まれたもので歌、ギター、踊りを合わせた音楽舞踊のことを指す。現在認識されている形式に至るのは、18世紀末頃から19世紀半ばを過ぎた辺りとされている(浜田 1983:13)。フラメンコは歌、踊り、ギターの3つから成り立っている。カスタネットは、踊りの中で常に使用する楽器ではないが、演奏者は紐を親指と人差し指にかけ、手を握るようにして演奏する。このスパニッシュ・カスタネットは、スペインで改良されており、その経緯は「世紀のカスタネットの女王」と言われたラ・アルヘンティーナ¹(La Argentina)(1890~1936)の影響であると次のように述べられている(蘆原 1935:257-258)。アルヘンティーナが5歳の頃、父親から玩具として一組のカスタネットを買ったが、不愉快な音響の楽器として捉えていた。そこで、カスタネットの大きさと内側の共鳴胴部分のバランスが悪いことに、5歳ながら気づいた。その時には実行に移さなかったが、4年後の9歳の時、父親の了解を得て老人のカスタネットの作り手に催促し、様々なカスタネットを作らせた。完成品は従来の物よりも軽く、共鳴胴の凹凸が少ない物へと変わった。また、2枚の板片を繋ぐ紐にも注目し、紐を通す穴と紐の太さの関係も考案した。このような改良を行ったアルヘンティーナは、スパニッシュ・カスタネットの芸術性を上げたのである。

2. 日本におけるスパニッシュ・カスタネットの幕開け

では、日本でこのスパニッシュ・カスタネットを使用した踊りが初めて踊られたのはいつのことであろうか。日本のフラメンコ黎明期について記述した大久保元春²(1934~現在)によると、日本においてスペイン舞踊が初めて上演されたのは、大正14(1925)年にアメリカから来日したテッド・ショーン(Ted Shawn)(1891~1972)が率いるデニーショーン舞踊団³(The Denishawn Dancers)で、帝国劇場で行ったとされている(大久保2010:232)。演目は、インド舞踊、ジャワ舞踊、日本舞踊などと共に「クアドロ・フラメンコ」があり、ショーの一つとして上演された。

また、ニューヨークでバレエのトゥ・ダンスやスペイン舞踊を習った舞踊家の高木徳子⁴(1891~1919)が挙げられる。高木は大正7(1918)年にジョルジュ・ビゼー(Georges Bizet)(1838~1875)の《カルメン(Carmen)》(1875年初演)を舞踊家の石井猷(1886~1962)らと共に踊ったという記述がある(曾田 1989:335-340)。曾田によると、このカルメンの踊りはビゼーの《カルメン》だけ

でなく、作家プロスペル・メリメ(Prosper Mérimée)(1803~1870)の小説から脱色したものを合わせた作品であったようである(曾田 1989:335-340)。ビゼーの《カルメン》のオペラでは、実際にカスタネットを使用しているが、メリメの小説の内容を含みながらも再編されていることから、実際にカスタネットが使用されたかは不明である。

その後、スペイン舞踊家が日本に初めて来日し踊りを披露したのが、昭和4(1929)年1月に前述したアルヘンティーナであった(大久保 2010:232)。その時の演目が、イサーク・アルベニス⁵(Isaac Albéniz)(1860~1909)の《セビリア(Sevilla)》⁶(1886年発表)、エンリケ・グラナドス⁷(Enrique Granados)(1867~1916)の《ダンス五番》⁸、マヌエル・デ・ファリヤ(Manuel de Falla)(1876~1946)⁹の《火祭り》¹⁰(1915年初演)等で、スペインのカルメンシータ・ペレスのピアノ伴奏によるものであった。しかし大久保は、これらは19世紀から20世紀にかけてスペインの近代民俗楽派として活躍した作曲家の作品で創作舞踊であるため、今日のフラメンコからは程遠いとしている(大久保 2010:232)。アルヘンティーナの来日時、実際に舞踊を観た日本の音楽・舞踊評論家である蘆原英了(1907~1981)は、「アルヘンチイナが昭和四年一月に来朝して、あの言葉を絶した見事な舞踊を見せて以来、私は殆んど一日としてアルヘンチイナを忘れたことはない。」(蘆原 1935:252)とまでカスタネットを使用したスペイン舞踊を賞賛している。なお、蘆原はアルヘンティーナのことをアルヘンチイナと記載している。

一方、日本人で先駆的にフラメンコを勉強し広めた人物が何人か存在した。フラメンコ研究家の濱田滋郎によると、スペイン舞踊の一つとしてフラメンコを踊っていた河上鈴子¹¹(1902~1988)、ギタリストではクラシックで有名な小倉俊(1901~1977)、スペインに留学し日本にスペインの歌やギターを紹介した勝田保世(1907~1978)¹²、蘆原英了が挙げられる(濱田 1987:32)。特に、舞踊家の河上鈴子は、日本に昭和6(1931)年に帰国した後、2月に日比谷公会堂で「河上鈴子帰朝舞踊公演」を行っている。また河上は、昭和6(1931)年3月6日~13日まで浅草大勝館¹³にて「河上鈴子舞踊公演」を行い、そこでのプログラムに「サロメダンス」「スパニッシュダンス」他と記録されている(日本洋舞史研究会 2003:11)。

また、スペイン人でフラメンコを初めて日本に紹介した舞踊家は、昭和7(1932)年に来日したカタルーニャのテレジーナ・ボロナート(Teresina Boronat)(1904~1983)で、東京劇場で五日間上演された。この演目は、「ファルーカ」「アレグリアス」「ソレアレス」「ホタ・アラゴネス」等である

(大久保 2010:232, 日本洋舞史研究会 2003:12)。

これらの記録から、日本での公演でカスタネットを使用したスペイン舞踊は、昭和4年(1929)年のアルヘンティーナであると言える。しかし、スパニッシュ・カスタネットを使用したフラメンコが一般的に日本人に知られるようになったのは、この昭和6(1931)の河上鈴子によるスパニッシュダンスや昭和7(1932)年に来日したテレジーナ・ボローナの踊り以降であったと考えられる。

3. 日本へのカスタネット輸入

ここまでスパニッシュ・カスタネットについて述べてきたが、日本で最初に販売されていたカスタネットは、柄付きカスタネットであった。柄付きカスタネットは、片手で演奏出来るようにスパニッシュ・カスタネットに持ち手をつけたもので、明治29(1896)年には共益商社楽器部から既に他の楽器と共に日本に輸入されていた記録

がある(共益商社 1984:不明)。当時の日本には、西洋の輸入カスタネットしか存在しておらず、スペイン舞踊はまだ日本に浸透していなかった。西洋楽器といえばオーケストラや楽隊用の楽器か、ピアノ、オルガンが中心であった時代で、カスタネットも同様にオーケストラ用の柄付きカスタネットであった。

ではここで、日本で販売されていたカスタネットを年代別に整理してみよう。表2は、日本の楽器店で販売されていたカスタネットの種類とその価格について、明治40(1907)年から昭和19(1944)年までの楽器店の広告や楽器販売のための商品目録から、筆者がカスタネットの部分のみを抽出し、内容を整理したものである。なお、これらの資料は、文政8(1825)年創業、日本最古の楽器店である三木楽器が残していた資料である。また、販売する楽器店により輸入国や表示の仕方が違うため、同一の物があったとしても、表示方法が異なる可能性があると考えられる。

表2: カスタネットの種類と年代別の販売価格

カスタネットの種類	販売楽器店	明治40(1907)年	大正4(1915)年	大正13(1924)年	大正14(1925)年	昭和3(1928)年	昭和5(1930)年	昭和7(1932)年	昭和19(1944)年
柄付きカスタネット	共益商社楽器店	1円50銭以上							
	三木楽器店		並:1円 上:1円40銭	3円以上	和製:2円 波蘭:1円70銭 (ポーランド フィッチ社)	和製:2円 独逸製:3円50銭 波蘭:3円50銭 (ポーランド フィッチ社)	2円70銭		4号:1円60銭 5号:2円10銭 6号:4円70銭
	星野楽器店							中:90銭 大:1円20銭 2個付き: 1円80銭	
スパニッシュ・カスタネット	三木楽器店								1号:62銭 2号:94銭 3号:1円25銭
	星野楽器店							50銭	
ミハルス	三木楽器店								大人用:73銭 児童用:54銭

出典(共益商社1907:83, 三木楽器店1915:15, 三木楽器店1924, 三木楽器店1925, 三木楽器店1928, 三木楽器店1930, 星野楽器店1932:59, 三木楽器店1944:17) 当時の楽器店の広告や楽器販売一覧から筆者が抽出したものである。

表2を見ると、現存している資料では、明治40(1907)年に販売されている柄付きカスタネットが一番古く、販売されている種類は、昭和5(1930)年まで柄付きカスタネットのみである。昭和7(1932)年になると、星野楽器店でスパニッシュ・カスタネットが販売されていることから、前述したように日本人にフラメンコの踊りが認識され始めたのがこの頃であったことがわかる。

大正13(1924)年までの柄付きカスタネットが、輸入された製品か日本で生産されたどうかは不明である。しかし、大正14(1925)年から日本製(和製)と外国製(ポーランド製(波蘭製)、ドイツ製(独逸製))の違いが表記されていることから、この頃から日本で生産されたカスタネットが販売さ

れていたことが分かる。この表の大正14(1925)年と昭和3(1928)年の部分に注目すると、日本製(和製)と外国製であるポーランド製(波蘭製)、ドイツ製(独逸製)に価格の差が見受けられる。まず、日本製の柄付きカスタネットは2円としているが、ポーランド製の楽器は大正14(1925)年が1円70銭だったものが、昭和3(1928)年には3円50銭と倍の価格になっている。この4年間の間に、外国為替の変動を理由としてか外国製品が値上がりしたのに対し、日本製の価格は一定であった。

次に昭和7(1932)年の柄付きカスタネットを見ると、中、大の他に2個付きという書き方がされている。これは、柄を中心に両側にカスタネットが付いているものである。

昭和19年の三木楽器店の楽器販売一覧では、柄付きカスタネットは4～6号の3種類の大きさがあり、スパニッシュ・カスタネットも1～3号と3種類、さらにミハルスが販売され、種類やサイズが豊富になった。ミハルスとは、スペインの舞踊用カスタネットと日本の四つ竹をヒントに、昭和8(1933)年頃、舞踊家である千葉躬治(1903～1996)が考案した楽器である。千葉はミハルス製作において、2枚の木片の片方を蝶番で付け、木片それぞれの外側に指を差し込むゴムバンドをつけることで、舞踊時の奏法が容易になるよう工夫した。奏法は、ゴムバンドに2本の指を差し込み、板を開閉することで音を鳴らすことができるようになっていた。また戦後の昭和22(1947)年、音楽教育家であった上田友亀(1896～1994)は、ミハルスをより演奏しやすく、様々な種類の奏法が出来る楽器としてハンドカスタネットを考案した。

明治40(1907)年から昭和19(1944)年までのカスタネット販売の種類と価格を見たところ、初めはオーケストラや楽隊用で使用される柄付きカスタネットのみの販売だったが、昭和7年頃、日本人にフラメンコが認識されると同時にスパニッシュ・カスタネット、更に舞踊で使用されるミハルスへと種類が増えたことが明らかになった。価格に関しては、大正14(1925)年から昭和3(1928)年の4年間で外国製の価格が上昇した反面、日本製は一定で、さらに種類が増えると同時に製品の値段が下がったことで、誰にでも購入しやすい楽器になっていったことが分かる。

4. 昭和30年代のカスタネット類

上田友亀が考案したゴム紐付きのハンドカスタネットが生まれて約10年後の昭和30(1955)年代に入ると、舞踊用やオーケストラ用カスタネットに加え、様々な形状や材質が異なるカスタネットが誕生してきた。それらに関する資料として、青木由之介、広岡淑生、小森宗太郎による『少年少女のための音楽実践全集目と耳による音楽の学習器楽

編第1巻リズム合奏の奏し方』がある(青木ほか 1961)。ここでは、リズム楽器として、教育楽器の中でも打楽器類が取り上げられているが、カスタネットについては演奏の専門家用と学校用とに分類され、それぞれの楽器の特徴が挙げられている。その中でも、特に学校用カスタネットは、ハンドカスタネットをはじめ、専門家用カスタネットに近い形状をしたもの、さらに現在ではあまり見られない形状も紹介されている。現在、小学校や幼稚園では、主に赤と青の色をしたカスタネットしか使われていないが、現在に至るまでに様々な形状のものが開発され、学校教育に取り入れられようとしていたのである。

日本に初めて輸入されたのは柄つきカスタネットであったが、国内で考案された教育楽器用カスタネットとして、スズがついたもの、マラカスの機能がついたもの、さらに素材が合成樹脂のものなどが販売された。このような様々なカスタネットの種類について、青木らの資料から紹介する。昭和36(1961)年頃に存在したカスタネットの種類と、およその価格を示したものが、次の表3である(青木ほか 1961:7)。

この資料では、学校で使用されていたカスタネットはハンドカスタネット以外にも、ダブルカスタネットや鈴つきカスタネット等、聞きなれない名前も見られる。価格を比較すると、専門家用と学校用では大きな違いがあることがわかる。学校用のカスタネットは、柄つきカスタネットを除き当時の価格で30円～45円前後であったにも関わらず、専門家用の方は、高いもので3,000円と約100倍の値段にも及ぶ。このことから、学校用のカスタネットは、使用方法だけでなく価格としても求めやすく、普及しやすいものであったことがわかる。

これらのカスタネットの形態、音色、演奏法はどのようなものであったのだろうか。表4は当時の専門家用カスタネットの特徴と演奏法について表にまとめたものである。

表3:昭和36(1961)年当時のカスタネットの種類と価格

専門家用		学校用	
種類	値段	種類	値段
柄つきカスタネット	1,000～3,000円	柄つきカスタネット	80円前後
		ハンドカスタネット	30円 〃
木製カスタネット	500～3,000円	ネオ・ハンドカスタネット	30円 〃
		ダブルカスタネット	35円 〃
ペークカスタネット	250～400円	シングルカスタネット	30円 〃
		鈴つきカスタネット	45円 〃

出典 青木ほか1961:7

表4: 専門家用カスタネットの特性と演奏法

楽 器 名	楽器の形態・材質	音色の特徴	演 奏 法
柄つきカスタネット (柄つきダブル カスタネット) 	柄つきカスタネットの中でも しゃもじ型の板にカス タネットを2つ揃えて紐で結ん だもので同時に4つの音が出 ることが特徴である。 カスタネットのうちでは最も 大きく重みもあり、また音 量も豊富で、1個の演奏で 充分効果のある楽器。 材質は、一般的に硬いペーク ライトが使われ、柄は主に 「かつら」が使われている。	カスタネットの中で、最も重 みがあり共鳴もあるが一振り で同時に4つの音が出てその 4つの音の高さが、少し違う 場合が多いため、澄んだひと つの単純な音を出すことが できない。	普通右手に持ち柄を水平に して構え、瞬間的に柄を上下 に振り音を出す。この奏し 方は確実に1つの音を出せ るが、音色的には柄を垂直 に持って前後にふったほうが 良い音が出る。 トレモロ奏もこの方がよく できるが、単音を出す場合 には柄を水平にして振った 方が確実である。
木製カスタネット 	専門家用として、最も多く 使われるもので、楕円形の 2枚の木片の端に2つの穴を 開け、太い紐を通してある。 木片の内側は適度にくり込 んであり、共鳴を持つよう になっている。 材質は紫檀(したん)や黒檀 を使っているものが上質で、 音色や耐久力に優れている。	澄んで甲高く、歯切れがよく、 カスタネット特有の美しさを 持っている。	テンポの早い細かいリズムが 奏せることが特徴である。 一般的には踊りの音楽に使 われ、一人で奏する場合と、 大勢で奏する場合とがあり、 その情熱的な音色とリズムは この楽器独特のものである。 奏法に関しては別途述べる こととする。
ペークカスタネット 	木製カスタネットに比べて 形が少し丸く、なかのくりが 深い事と、材質がペークラ イトでできている他は、ほと んど変わらない。	音色は木製のものよりは少し 固いが、むしろはっきりした 明るい音が出る。	

出典 (青木ほか 1961:8-17)に基づき門脇が作成したものである。

専門家用カスタネットは、カスタネットに持つ棒がついたような柄つきカスタネットと、紐によって2枚の木片が繋げられた木製カスタネット、木製カスタネットが少し丸みを帯び、材質がペークライトに変わっただけのペークカスタネットの3種類である。この中でも、柄つきカスタネット、木製カスタネットは、表1で示したヨーロッパを中心とした国々で使用されているカスタネットの、柄付きカスタネットとスパニッシュ・カスタネットと同類の物である。ペークカスタネットは、材質がペークライト(フェノール樹脂)、つまり合成樹脂で出来たスパニッシュ・カスタネットである。

柄つきカスタネットには、柄つきダブルカスタネットがあり、カスタネットを4個叩いているような珍しいものも含まれている。主な特徴は、持ち手を前後に振ることでトレモロ奏が可能なことである。木製カスタネットやペークカスタネットは、舞踊用としてよく知られているカスタネットである。音色は澄んでおり、歯切れはよいが、子どもが演奏するには奏法が難しいため、学校用には向いていない。しかし、青木らは「カスタネット本来の効果を発揮させるために、ぜひ学校教育で使いたいものです」(青木ほか 1961:7) と述べている。

次に、学校用カスタネットの特性と演奏法について表5にまとめる。

表5:学校用カスタネットの特性と演奏法

楽 器 名	楽器の形態・材質	音色の特徴	演 奏 法
柄つきカスタネット 	形、奏し方ともに専門家用と全く同じで、ただ材質が違う。材質は普通「さくら」を用い、柄のところは「かつら」「ほう」などが用いられている。	細かいリズムを続けて打つのに適している反面、ひとつの音を出すことが困難なので、トレモロ奏や装飾音奏には効果があるが、普通のリズム奏には適さない。	合奏などに使う場合、特別な演奏効果や擬音的な(あるもの音を真似たような)効果をねらう時に使うと効果がある。
ハンドカスタネット 	一般的に最も多く使われている楽器でゴム紐の弾力を利用し、その開き閉じによって音を出すものである。ある程度使うと、ゴム紐が伸びたり切れたりするので、時々取り替えなければならない。発音体に金属鉾が使われている。材質は普通「さくら」を使い、エナメルで塗って着色してある。	はっきりとした歯切れの良い音を出す。単音ではっきりとした出すことができる。大勢で使うときは、そう音がはなはだしく、かえって使えない刺激を与えるので、奏し方や使い方には、十分注意しなければならない。	奏し方も優しく、幼稚園や小学校と低学年によく適している。奏し方によっては小学校の高学年や中学校でも十分活用できる楽器である。奏し方は普通打ち、トレモロ奏、装飾音奏が示されている。詳しい奏法に関しては別途述べることとする。
ネオ・ハンドカスタネット 写真なし	ハンドカスタネットの欠点を除こうとして、新しく考案されたもので、発音体の金属鉾を木質にした。またゴム紐にS字型の留金具を取り付けこの金具の移動によって、ゴム紐の伸びや切れを防ぐように考案された。	音質が、柔らかくなった。	奏法については述べられていない。留金具が緩いと使用中にだんだんゴム紐が緩んできて、開き閉じが不活発になり、演奏が上手くできなくなるため、注意しなければならない。
ダブルカスタネット  シングルカスタネット 写真なし	材質は合成樹脂でできている。ダブルカスタネットには片面に数粒の小石を入れ、開き閉じによる発音の他に、楽器を振ることによって、マラカスのような音が出るので、マラカスタネットとも言われている。シングルカスタネットについては、特に述べられていない。この2つのカスタネットは主に内部が空洞のため、耐久力では木質カスタネットに劣るようである。	木質カスタネットに比べて、澄んだ軽い音を出すのが、内部に入っている小石が、ときには unnecessary 雑音となって演奏の妨げになる場合がある。	記述なし。
鈴つきカスタネット 	ハンドカスタネットと同質のもので、結び目のところに2個の鈴をつけたものである。	記述なし。	記述なし。
その他 サウンドカスタネット 写真なし	ハンドカスタネットと同質のもので、ゴム紐の結び目を木片の両穴のところで結んであるものである。	記述なし。	記述なし。

出典 (青木ほか 1961:8-17)に基づき門脇が作成したものである。

学校用カスタネットには、柄つきカスタネット、ハンドカスタネット、ネオ・ハンドカスタネット、ダブルカスタネット、シングルカスタネット、鈴つきカスタネット、サウンドカスタネットの7種類が挙げられ、専門家用カスタネットと比べても種類が豊富である(青木ほか1961:8-17)。柄つきカスタネットは、専門家用の材質がペークライトであるのに対し、学校用はさくらを用いているというように材質が異なるだけで、演奏法などは全く同じ形態である。この楽器は、柄の部分を持って前後に振るだけでトレモロ奏が可能であるが、児童が行う様々なリズム演奏には適さない。

ハンドカスタネットとは、ハンドカスタのことである。奏法はこれまでも述べてきたように、リズム打ちだけにとどまらず、トレモロ奏、装飾音奏が可能であるため、小学校高学年や中学校でも様々な活用ができる。

ネオ・ハンドカスタネットは、ハンドカスタの形態とほぼ同じであるが、鉾の部分に金属から木質になったことで、柔らかい音質になっていると述べている。

ダブルカスタネット、シングルカスタネットは、材質が木ではなく合成樹脂でできているとしている。この楽器が雑誌『月刊教材教具』の広告に初めて登場するのは、昭和31(1956)年9月号のことで、当時は「ダブルカスター」という名前で、柏楽器ダブルカスター社によって販売された(図1)。

全国舞踊コンクール審査員
 テイチクレコード専属
 則武昭彦先生御推薦
 宗鳳悦先生御推薦
リズム楽器の王!! ダブルカスター

特徴

1. 音韻明快澄み切つてをり
2. 歯切れよく
3. 音がやわらかい
4. 音量が豊である
5. 形態…芸術的で…清潔
6. 音響板が着脱自在で粒状物を入れて振るとシャンシヤラシヤラときれいなマラカスの音が出る
 (三つの特許申請中)

ダブルカスター ¥35

製造 柏 楽器 器 東京都豊島区日出町3-10
 販売 ダブルカスター社 東保クラブ2階 電話71171

図1:ダブルカスターの広告

出典 (教材用具研究社 1956a:13)

この楽器の特徴は次の6点が挙げられている(教材用具研究社1956a:13)。

- 1.音韻明快澄み切っており
- 2.歯切れよく
- 3.音がやわらかい
- 4.音量が豊である
- 5.形態…芸術的…清潔
- 6.音響板が着脱自在で粒状物を入れて振るとシャンシヤラシヤラときれいなマラカスの音がでる(原文ママ)

ハンドカスタが全国的に普及した頃、ハンドカスタを元に材質を変え、マラカスのような要素も足した新しい楽器としてダブルカスタネットが誕生した。ダブルカスターを推薦する教員として、全国舞踊コンクール審査員でテイチレコード専属の則武昭彦(1911~不明)、全国中学校音楽教育研究会都副支部長の宗鳳悦(1912~不明)の名前が掲載されており、教育家も認める新しいカスタネットであるという主張がされている。後に、昭和31(1956)年11月号の『月刊教材教具』の広告では、文部省教育用品審査合格品と示されている(教材用具研究社1956b:44)。

鈴つきカスタネットもダブルカスタネットと同様、ハンドカスタに鈴の要素が加わり、同時に2種類の音を出すことが可能である楽器として発売された。この楽器は、ハンドカスタの発売元と同じ白桜社で作られており、昭和27(1952)年9月号の『月刊教材教具』の広告部分に初めて示された(教材用具研究社1952:4)。また、使用用途については、「主として遊戯舞踊用」(教材用具研究社1957:6)とされ、玩具に近い楽器であると思われるが、ハンドカスタから発展した楽器の一つであった。

また他に、サウンドカスタネットがある。表5にある通り、形態はハンドカスタそのまま、ゴム紐の結び目を木片の両輪の部分で結ぶという若干の違いがみられるが、写真も示されていないため、実際の違いについては定かでない。

このように、青木らが示した「学校用カスタネット」は、現在ではあまり見かけない種類の楽器が多くあったことが明らかになった。その種類は、柄の部分で音を振ることで音が出る柄つきカスタネットと、拍手をするように演奏するハンドカスタの2種類に分けられる。また、柄付きカスタネット以外のカスタネットは、上田が考案したハンドカスタを基本に、他の楽器の特徴を付随させるなど、様々な工夫がこらされていることがわかる。

5. 様々な種類のハンドカスタ誕生の背景

では、昭和30(1955)年頃に様々な種類のカスタネットが作られるに至ったのには、どのような背景があったのであろうか。考えられる理由として、次の三点が挙げられる。

まず一点目は、体操と音楽の融合により、体操の中でのカスタネットという新しい役割ができたことである。カスタネットが西洋楽器として使用されていた初期の頃は、オーケストラや楽隊用の楽器として柄付きカスタネットが使われ、次にスペイン舞踊の中で使用する楽器としてスパニッシュ・カスタネットが輸入された。一方で、教育の中では、明治時代から音楽に合わせた行進、運動、動作、また昭和初期にかけて、唱歌遊戯が盛んに行われていた

(奥中 2008:34)。音楽教育や体操教育の礎を担った伊沢修二(1851～1917)は、唱歌と運動を合わせた唱歌遊戯の重要性について述べている(奥中 2008:106-107)。さらに、昭和8(1933)年には、千葉が唱歌等に合わせた体操に、リズムの基礎を修得するため自身の考案したミハルスを加えたことで、ミハルス体操が生まれた。当時の唱歌科では、器楽教育が一部の教師によってのみ行われるに留まっていたが、体操教育に音楽教育が融合する形へと発展したことで、教育用としてカスタネットの新しい道筋が生まれた。

二点目は、学習指導要領制定により、教育用楽器にカスタネットも含まれたことである。文部省が初めて教育用楽器を定めたのが、戦後、初めての学習指導要領となる昭和22(1947)年学習指導要領音楽編(試案)である。その中で、第1学年が使用するのに相応しい楽器に関する部分の内容を見ると、「児童の身体的発育状態を考慮し、楽器を使用する場合には小型のものを選択することが望ましい。例えば、拍子木・ミハルス・トライアングル・鈴・カスタネット・タンブリンその他児童の製作した簡単な打楽器を主体とする。」(国立教育政策研究所ホームページ：<https://www.nier.go.jp/guideline/s22ejo/chap6.htm>, 2015年11月22日閲覧)とある。これら楽器の中から、カスタネットに属する物を抽出すると、ミハルスとカスタネットが挙げられる。ここでのカスタネットとは、昭和23(1948)年に文部省が提示した『合奏の本』の中でも書かれているように、柄付きカスタネットとスパニッシュ・カスタネットのことを示している(文部省 1948:77)。ハンドカスタ自体は、既に昭和22(1947)年頃に考案されていたが、まだ全国的な普及には至っていなかったため、文部省が提示する楽器の中には含まれていない。次に学習指導要領が改訂された、昭和26(1951)年改訂版小学校学習指導要領音楽科編(試案)第1学年のカスタネットに関する楽器は、カスタネット属とまとめられている。昭和26(1951)年の改訂では、指導内容が5領域に分かれ、「リズム反応」が新たに加えられた。ここでは、音楽に合わせてリズムカルに身体を動かす遊戯に加え、行進やスキップのリズムをカスタネット等の楽器で表現するなどの内容が行われていた。このような背景から、リズムを刻むことができるミハルスに加え、既に普及し始めていたハンドカスタがカスタネット属に含まれた。しかし、柄付きカスタネットは正確なリズムを刻みにくく、スパニッシュ・カスタネットは児童にとって扱いが難しかったことから排除されていき、新しいカスタネットが生まれるきっかけが訪れたと考えられる。

三点目に、昭和30(1955)年から40(1965)年代は、各種の楽器が音楽室に導入され、授業環境の整備が充実し始めた時期であったことである。昭和22(1947)年に考案されたハンドカスタに始まり、昭和27(1952)年の広告には鈴付きカスタネット、さらに昭和31(1956)年の広告にはダブルカスタネットが示された。これらの楽器は、文部省教育用品審査に合格している楽器として販売されていた。文部省が推薦する楽器であるという宣伝効果も、カスタネットが様々な形に発展した動機と言える。また、1人1個持ちを推奨したこともあり需要が増え、爆発的に売れることに繋がった。その後、昭和33(1958)年に、教育用楽器基準が示され、楽器は43品に絞られた。

このような理由から、楽器産業最盛期である昭和30年頃は、多様な機能をもった多数の種類のカスタネットが国内で生み出され、カスタネットの全盛期となった。

おわりに

明治時代になり、日本は欧米を中心とした外国との交流が始まった。音楽も西洋音楽が入ってくるようになり、それと同時に西洋の楽器も輸入され始めた。当時、輸入されていたカスタネットは、オーケストラや楽隊用の柄付きカスタネットのみであった。大正時代になると、大正14(1925)年にデニッシュ・舞踊団や大正7(1918)年に高木徳子によるスペイン舞踊公演が行われた。また、昭和4(1929)年にラ・アルヘンティーナのカスタネットを使用したスペイン舞踊、昭和6(1931)年に河上鈴子によるスペイン舞踊、昭和7(1932)年にテレジーナ・ボロナートがフラメンコ舞踊を紹介したことで、一般的にもスペイン舞踊が認識されるようになった。

カスタネットを販売していた会社の記録によると、明治時代から昭和5(1930)年頃までは、外国製や日本製の柄付きカスタネットのみの販売であったが、昭和7(1932)年頃からは、スパニッシュ・カスタネットも販売され始めたことがわかった。その理由は、フラメンコを含むスペイン舞踊が日本人に受け入れられ、普及したことが考えられる。このような影響から、千葉躬治によるミハルス、上田友亀のハンドカスタの考案へと発展したことが明らかになった。

さらに、子どもにも使いやすく安価であったハンドカスタが学校教育で使用され始めると、またたく間に全国に広がった。昭和30(1955)年頃にはハンドカスタを起点として、ダブルカスタネットなど様々な種類のカスタネットが生まれた。その背景には、①音楽と体育を融合した唱歌遊戯の中でカスタネットが使用されたこと、②学校教育の中で器楽教育が盛んになるにつれて需要も高かったこと、

③学校の環境設備がなされ、雑誌などで宣伝がなされていたことの三点を挙げた。しかし、その後はほとんどの種類のカステネットが姿を消し、機能的にシンプルなハンドカステ(現在のカステネット)のみが残っているのが現状である。

本研究では、明治時代から昭和30(1955)年頃を中心に、カステネットがどのように認識され、また種類が豊富になった背景を探った。今後は、昭和30(1955)年以降の学校教育におけるカステネットの扱われ方について、年代を追って整理することを課題とする。

- ¹ 本名はアントニア・メルセ・イ・ルケ(Antonia Mercé y Luque)。
- ² 大久保元春は、昭和9(1934)年東京都生まれ。経営コンサルティングに従事する一方、日本フラメンコ協会常任理事。主な著書に『フラメンコの風に抱かれて』(菁柿堂)が挙げられる。
- ³ デニション舞踊団は、日本、中国、インド、インドネシア、ミャンマー、マレーシア、満州、スリランカ各地を回り、オリエンタルツアーを行った。そのツアーの際、来日したのは、ツアーの最初と最後となる、大正14(1925)年と昭和元(1926)年であった。デニション舞踊団の母体であったデニション・スクール(Denishawn school)は、ソロで活動をしていたデニスが後の妻となるセント・デニス(Ruth St.Denis) (1877-1968)と出会い、大正4(1915)年ロサンゼルスに開設した学校で、多くのモダン・ダンスの先駆者達を輩出した。昭和6(1931)年の学校閉鎖と共に解散(小笠原 2010:37-38)。
- ⁴ 高木徳子は明治24(1891)年に神田に生まれ、小川小学校後期4年を卒業後、14歳で日本銀行に給仕として勤める。明治39(1906)年に15歳でアメリカから帰国していた陳平と結婚し渡米する。その後は職を転々とし、明治42(1909)年からは奇術師となり欧米を巡業する。明治44(1911)年からダンススクールに入学し、正式にバレエのトゥ・ダンスやスペイン舞踊を学ぶ。その後一座を結成し英米を巡業し、大正3(1914)年に日本に帰港。大正4(1915)年に帝国劇場でトゥ・ダンスを披露する。大正5(1916)年にはヴァラエティー高木徳子一座を旗揚げし、有楽座や浅草・日本館などで踊るが、その間も一座の経営等でトラブルが起こる。大正7(1918)年9月に石井漢等と共に「カルメン」「沈鐘」等を講演し好評を博す。同年に陳平と離婚。大正8(1919)年に巡業先の大牟田にて28歳の若さで死去(曾田 1989)。

- ⁵ スペインの作曲家・ピアニストで、スペイン民族音楽に影響を受けている。正式名は、イサーク・マヌエル・フランシスコ・アルベニス・イ・パスクアル(Isaac Manuel Francisco Albéniz y Pascual)である。
- ⁶ スペイン組曲作品47より第3番である。
- ⁷ スペインの作曲家。正式名は、エンリケ・グラナドス・イ・カンピニャ(Enrique Granados y Campiña)である。
- ⁸ スペイン舞曲集 Op. 37-第5番《アンダルーサ》(1892-1900の数回に分けて発表)のことを指す。
- ⁹ スペインの作曲家で、後にアルゼンチンへ亡命した。正式名は、マヌエル・デ・ファリャ・イ・マテウ(Manuel de Falla y Matheu)。
- ¹⁰ 一般的には《火祭りの踊り》と呼ばれ、舞台音楽「恋は魔術師」(El amor brujo)の中に含まれる一曲である。悪魔払いの際の音楽とされている。初演は1915年であるが、1916年に再発表した。
- ¹¹ 河上鈴子は、明治35(1902)年に東京に生まれ、幼少期から上海で暮らし、海外から来るアーティストや、スタジオを構える外国人講師にバレエ、スペイン舞踊、様々な民族舞踊、フラメンコなどの指導をうけた。その後、欧米、中南米、北米で公演活動を行い、多くの弟子を輩出した。昭和6(1931)年に日本へ帰国してからは、日本劇場付属音楽舞踊学校の舞踊主任教授をつとめた。
- ¹² 勝田保世は日本人として最初フラメンコ・ギター弾きである。明治40(1907)年に東京に生まれ、東洋音楽学校(現在の東京音楽大学)を経て昭和5(1930)年にイタリアのナポリに渡り声楽、マンドリンを学ぶが修得には至らなかった。日本に帰国後、昭和12(1937)年に再度スペイン、フランス経由でイタリアに渡る。スペインでは、闘牛師のもとに弟子入りし、その時に付けてもらった名前が“Jose”で、後にペンネームである“保世”となった。しかし闘牛師への道は断念し、ついでに習ったフラメンコに魅了される。戦後、昭和21(1946)年に帰国し、帝劇や宝塚などでフラメンコギターの演奏活動を行う。また、映画「黄線地帯」「永遠の人」の音楽を担当する。昭和53(1978)年没(勝田 1978)。
- ¹³ 1908年開業の日本の映画館であり、実演劇場としても一部行っていた。1971年に廃業。

【参考文献】(著者姓の五十音順)

青木 由之介; 広岡 淑生; 小森 宗太郎

1961『少年少女のための音楽実践全集目と耳による音楽の学習器楽編第1巻リズム合奏の奏し方』東京: 音楽之友社.

蘆原 英了

1935『現代舞踊評話』東京: 西東書林.

網代 景介; 岡田 知之

1981「カスターネット」『打楽器事典』東京: 音楽之友社: 37-38.

網代 景介; 岡田 知之; 松原 龍一

1993「カスターネット」『ニューグローヴ世界音楽大事典』4: 柴田 南雄; 遠山 一行 (総監督) 東京: 講談社: 408-409.

大久保 元春

2010「第5章日本のフラメンコ黎明期の歩みと受容化への道」『日本・スペイン交流史』坂東省次; 川成洋 (編) 東京: 株式会社れんが書房新社: 231-244.

小笠原 愛

2010「ルース・セント・デニスの腕 (特集演劇)」『文芸研究』(111): 37-53.

奥中 康人

2008『国家と音楽—伊沢修二がめざした日本近代—』東京: 春秋社.

教材用具研究社

1952「ハンドカスターの広告」『月刊教材教具』4(9): 4.
1956a「ダブルカスターの広告」『月刊教材教具』8(9): 13.
1956b「ダブルカスターの広告」『月刊教材教具』8(11): 44.
1957「特集望ましい設備基準 (小・中学校) (本社教材教具研究部試案) 主要楽器備品総覧」『月刊教材教具』9(3): 2-13.

国立教育政策研究所ホームページ

<https://www.nier.go.jp/guideline/s22ejo/chap6.htm>
(2015/11/22 閲覧)

勝田 保世

1978『砂上のいのちフラメンコと闘牛』東京: 音楽之友社. 共益商社

1984「1896『音楽雑誌』60(8)広告」『音楽雑誌』77(1): 宮地恵之助: 東京: 出版科学総合研究所.

共益商社楽器店

1907『西洋楽器目録』東京: 共益商社楽器店.

島 みち子

1989『カスターネット奏法スペインの木霊〜カスターニューエラス』東京: 龍吟社.

曾田 秀彦

1989『私がカルメンマダム徳子の浅草オペラ』東京: 晶文社. 日本洋舞史研究会 (編)

2003『日本洋舞史年表 I』東京: 日本芸術文化振興会 新国立劇場情報センター.

浜田 滋郎

1983『フラメンコの歴史』東京: 晶文社.

星野楽器店

1932『訪楽器総目録昭和七年度』名古屋: 星野楽器店.

三木楽器店

1915『大卸賣正味目録虎の巻大正四年改正』大阪: 三木楽器店.

1924『三木楽器店商品録大正拾参年六月印行広告』大阪: 三木楽器店.

1925「奥國ポーランドファッチ社製品管楽器」『新着吹奏管楽器大正十四年三月広告』大阪: 三木楽器店.

1928「奥國ポーランドファッチ社製品管楽器」『新着吹奏管楽器昭和三年四月広告』大阪: 三木楽器店.

1930『三木楽器店商品録昭和五年版広告』大阪: 三木楽器店.

1944『昭和十九年三月調楽器公定価格表』大阪: 三木楽器店.

目黒 三策

19--『クラシック・ポピュラー実用ギター百科』東京: 水星社.

文部省 (編)

1948『合奏の本』東京: 日本書籍.

(かどわき さきこ 音楽教育学)